

# ファッションライブラリーにおける 生活デザイン学科の取組とその評価

## Activities and Their Evaluation of the Department of A/I Design GCWC At Fashion Library, Gifu City Library

村上 眞知子 今井 素恵  
Machiko MURAKAMI Motoe IMAI

### Abstract

Gifu City established a Branch of Gifu City Library at the lower space of JR Gifu Station in January 2002. At the same time The Fashion Library is also established in the corner of the City Library to support the apparel industry of Gifu area. We, Department of Apparel and Interior Design, Gifu City Women's College sought a place to send our information in the mid-city. We, Dept. of A/I Design and FL, designed the space of the FL to use it as a gallery. We started to display works of students there in March 2002 to inform and announce the researches, works and artificial works of teachers and students. After one year had passed authors surveyed the effect of establishment of Fashion Library and our activities of the Dept. of A/I Design. The results are shown in this paper and we will get some suggestions and guidelines which direction we should go for the future in terms of co-work of industry, government and college.

Key words: gallery 展示、City Library 市立図書館、open class 公開講座、part of public college 公立大学の役割、co-work of industry, government and college 産官学連携

### 1. 緒言

2002年1月、岐阜市立図書館分館がJR岐阜駅東側高架下に開館し、同時にその一角に、岐阜市の地場産業であるアパレル産業を支援する目的で、ファッションライブラリーが開設された。一方、生活デザイン学科は同じ時期に、学科の情報発信と地域支援を目的とした「場」を市中心部に設けることを計画していた。その結果、ファッションライブラリーと本学科が協働で、ファッションライブラリーに作品展示スペースを設けること、その展示企画、運営を行うこととなり、同年3月より、教員、学生の作品展示活動を開始した。

ファッションライブラリーではファッション、デザインに関する図書、雑誌を幅広く揃えており、フロア中央のプラズマTVでは海外コレクションのファッションチャンネルが常に放映されている。一般の図書館利用者のみならず、アパレル関係者にもいち早くこれから流行するスタイルや色、素材などの情報を提供する情報発信基地となっている。また、同施設はギャラリーとして機能するための、スポットライト、展示用パーテーションなどの施設を備えている。

本研究では、これらファッションライブラリーの開館以降、ファッションライブラリーとの協働で、本学科が取組んできた様々な活動を紹介するとともに、各企画に対して行ってきたアンケート調査の解析を通して、今後の活動に対する指針を得る

ことを目的としている。

### 2. ファッションライブラリーとの協働による活動の概要

2002年1月のファッションライブラリー開館に際しては、展示用パーテーションの設置、展示台の形状などについて市立図書館と検討後、3月から本学科の展示を開始した。展示は月毎に学科各研究室が展示を担当するシステムを作り、アパレル設計生産研究室が運営を担当した。展示は当初ファッションライブラリー室内、入口両袖のショーケースで始まったが、その後ハートフルスクエアジー（HSG）1階西玄関ショーケースも含め3ブロックにわたる。表1に毎月の展示内容を示す。

また同年11月3日には、例年本学大学祭で学生が自主企画で行うファッションショーを、学外でも発表したいという学生の希望を実現する「場」として、公立図書館・ファッションライブラリーでのファッションショーが実現した。2回のショー公演のいずれも学生が主体となって企画、運営した<sup>1)</sup>。これは同施設がアパレル産業支援というビジネス支援機能をもつという意味に於いても注目され、学生の地域交流の実現とともに公立図書館で初めてファッションショーを行うという結果となった。

さらに2003年1月、ビジネス支援図書館として産官学の共同

## ファッションライブラリーにおける生活デザイン学科の取組とその評価

表1 ファッションライブラリー展示 実施の概要 2002.4～2004.3

	スペース	西側ショーウィンドウ	ショーウィンドウ	ファッション講座
2002年 4月	「旧矢筈原家住宅」中垣奈々重 「Regenerated Backhouse」杉山佳枝		「Wedding Dress」竹谷沢子	
5月	「知多おりものをデザインする2001.01ファッションショーより」 伊藤陽子			
6月	「からむし織り作品」下平陽子 「メイドー maid」尾崎美子・松島千景		「JUNE BRIDE」春日清香 「JUNE BRIDE」清水麻美	
7月	「TRICK ART WORKS EXHIBITION」久保村里正		「歴史服のデザインから 古代エジプトの衣文化」森朋恵 「和洋意気統合！」矢田宏美	
8月	「ル・コルビュジエの『母なる人の住宅』の模型展」今井研究室		「Wedding Dress 1・2」 伊藤優美	
9月	「日本の伝統的建造物に関するパネル展」 矢口研究室		「『一枚の布』和紙・竹」 伊藤陽子	
10月	「Dress of Black」村上研究室	「Dress of Black」田中美有	「スラッシュキルトを使ったスーツ、スーツ2」竹内千恵	
11月	「ブックギャラリー」石松研究室	「ブックギャラリー」平真由美	「オンワード新人デザイナー ファッション大賞入選『囲む』」 伊藤美加 「大地」伊藤美香、「鏝」安田知加	
12月	「ミニチュア織機によるデザイン織物」 宮本研究室	「自然『描き染め』・『絞り』」 藤田美加	桃林ファッションショー2002 「脱皮～蛹から蝶へと～」木口花恵 「液体室素」井上里英香	
2003年 1月	第2 岐阜ブランドコレクション入賞作品展 ディスプレイ担当：岐阜市立女子短期大学・生活デザイン学科			「ファッションを語る」伊藤陽子
2月	「Identity～自己主張～」 伊藤研究室	「空を絞りで表現～Rainbow～」 大野秋奈 吉田智美		
3月	「絞り染め・消費科学の作品展示」 野田研究室		「Fairy」後藤ゆかり 「リズム」西浦典子	
4月	生活デザイン学科 卒業研究制作 2002 優秀作品展	「絵画から発想する『変形ストライプ』」林奈津子 「絵画から発想する『クラシック』」林奈津子		
5月	「草平庵」project 川の記憶のデザイン 今井裕夫	「檻樓を着たモダニズム」 今井裕夫	「bloomin'」後藤ゆかり 「White Rose」高橋三恵	「草平庵」project 川の記憶のデザイン 今井裕夫
6月	「環境感知器入門」石松丈佳		「Rouge」山田寿実 「ミルフィーユ」西尾旭代	「環境と私たちをつなぐ造形」 石松丈佳・山田綾
7月	「Hat Trick～HotなHatたちのカーニバル～」 村上研究室		近代ヨーロッパ衣裳の復元・ クリノリン・スタイル 岡本かよ エンパイア・スタイル 中崎麻美	「羊毛から手作りフェルト帽子を作るう」 村上真知子・今井素恵
8月	県立岐阜三田高等学校 ファッション科「編みの世界」			
9月	「日本の伝統的住宅・アメリカ住宅のパネル展」矢口研究室	「WEDDING～愛する息子とパートナーへのプレゼント」 伊藤陽子	川久保玲から学ぶ服作り 「集合 まる」伊藤美香 「集合 そで」伊藤美香	「日本の住宅の移り変わり」 矢口直道
10月	「ミニチュア織機によるデザイン織物」宮本研究室	「T time」 ファッションデザイン研究室	「万華鏡 華」田中美有 「万華鏡 雪」田中美有	「手足の冷えのメカニズムと 着装行動」宮本教雄
11月	「TRICK ART WORKS EXHIBITION II」久保村里正		「ジャケットの制作」林治枝 「Jewelry」木口花恵	「錯視～トリックアートへのご招待」久保村里正
12月	「陽子の『一枚の布』～布とファッション～」 伊藤陽子			「一枚の布」伊藤陽子
2004年 1月	第3 回岐阜ブランドコレクション入賞作品展 ディスプレイ担当：岐阜市立女子短期大学・生活デザイン学科			
2月	「卒業研究作品、公開講座作品、 F to D」野田研究室		「スーツの製作～toi-toi-toi～」 赤坂未由季	「草木染めにみる『日本の色と』 ファッション」野田隆弘
3月	生活デザイン学科 卒業研究・制作2003 優秀作品展			

## ファッションライブラリーにおける生活デザイン学科の取組とその評価

企画「第2回岐阜ブランドコレクション」<sup>2)</sup>入賞作品展、およびミニ講演会「ファッションを語る」(講師:本学科伊藤陽子助教授)を開催した。本企画は、同施設の開館1周年にあたることから、ファッションライブラリー主催で、よりビジネス支援の要素、産官学連携的要素を明確にした。

2003年度からは、同ギャラリーで「ファッション講座 in ファッションライブラリー」と題し、担当研究室の教員が展示に因んだ月1回の公開講座を行う新たな企画を実施し、同年5月から公開講座を開始した。同年8月には、県立高校の生徒による作品展示が新たに行われた。また、11月8日には昨年同様、学生企画による大学祭ファッションショーを再編成し「Color Palette」と題してファッションライブラリーにおいてショーを行った。

### 3. 研究方法

#### 1) 調査の概要

岐阜市立生活デザイン学科2003年3月卒業生61名、2003年4月新2年生63名の合計124名にアンケート調査を実施した。卒業生は2003年3月7日に、新2年生は2003年4月7日に集団調査法でアンケートを行った。

また、ファッションライブラリーにおいて、岐阜市立生活デザイン学科関係者以外の外部来場者に対して留め置き法においてアンケート調査を行い、33名のデータを得た。調査時期は2003年6月から11月末までである。

調査項目は、ファッションライブラリーの来場履歴や時間帯について、チラシの閲覧について、展示活動について、ギャラリートーク&ワークショップについて、および被調査者の基本属性である。

集計は、本学生活デザイン学科学生、外部来場者を対象とする調査のそれぞれについて単純集計、クロス集計を行った。

### 4. 結果および考察

外部来場者の年齢構成、居住地域は、表2、表3に示すとおりである。被調査者数が少ないことから統計的には不十分であるが、愛知県からの来場者が全体の10%を超えていること、また、勤務先、通学先が名古屋市という来場者の割合も約10%であることなど、交通の便のよさを反映して市外からの来場者も多いことがわかる。

図1に本学科の学生および外部来場者に対して来場履歴を「ファッションライブラリーに行ったことがありますか?」で質問した結果を示す。学生の66.1%(82人)が「言ったことがある」と答えている。外部来場者では、78.8%(26人)の人が来場したことが「ある」と答えている。ファッションライブラリーに行ったことのない学生に「今後利用してみたいか」の質問に対して、64.3%(27人)の学生が「そう思う」と答えた。

表2 外部来場者の年齢

年齢	人(%)
19歳以下	5 (15.2)
20歳代	9 (27.3)
30歳代	7 (21.2)
40歳代	5 (15.2)
50歳代	2 (6.1)
60歳代	4 (12.1)
70歳代以上	1 (3.0)
計	33 (100.0)

表3 外部来場者の居住地域

地域	人(%)
岐阜市	20 (60.6)
岐阜県	7 (21.2)
愛知県	4 (12.1)
その他	2 (6.1)
計	33 (100.0)

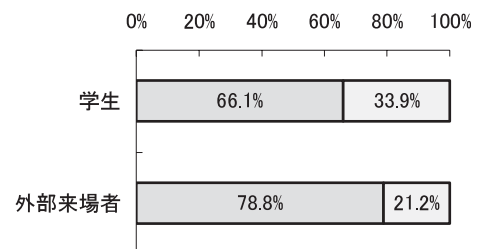


図1 ファッションライブラリーに行ったことがありますか

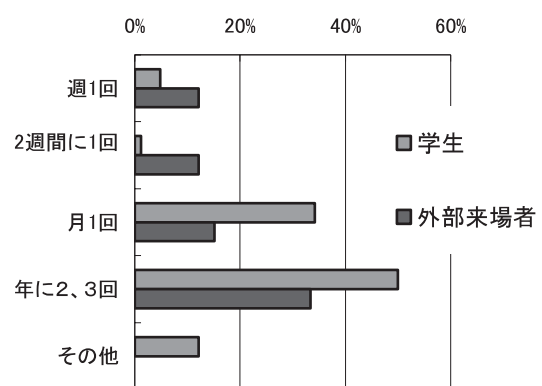


図2 利用頻度

利用頻度としては図2に示すように、学生の場合、「年に2、3回」が50.0%(41人)で、次いで「月に1回」で34.1%(28人)であった。外部来場者では、「年に2、3回」が33.3%(11人)で、次いで「月に1回」で15.2%(5人)であった。利用する時間帯については、図3に示すように、学生の場合69.5%(57人)が「夕方」(16:00~19:00)と答えており、62.9%(78人)が岐阜市外に住んでいることから、授業後の帰宅途中

ファッションライブラリーにおける生活デザイン学科の取組とその評価

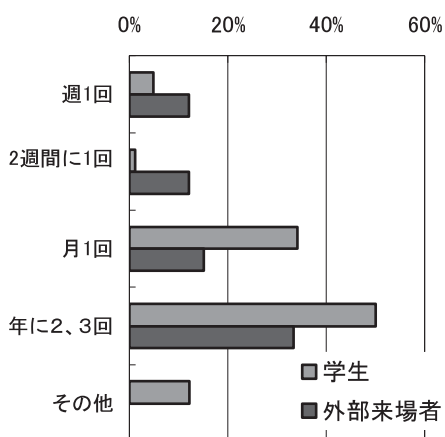


図3 時間帯

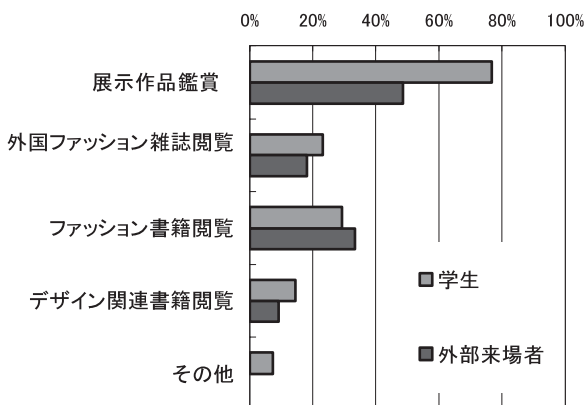


図4 利用目的

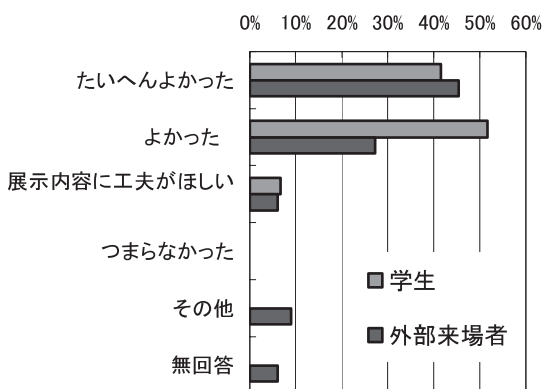


図5 展示作品の感想

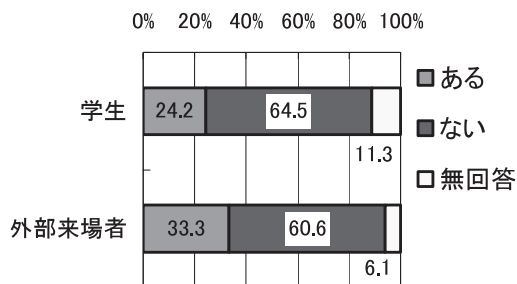


図6 チラシを見たことがあるか

に立ち寄っていることがわかる。外部来場者の場合は、「午後」(12:00~16:00)が51.5%(17人)で、これは主婦や社員の来場と考えられる。次いで「夕方」が15.2%(5人)と回答があった。授業後、学校帰りに立ち寄る学生や、帰宅途中の会社員などと思われる。今回の調査では行っていないが、休日、平日の違いも調べてみるとよいであろう。図4は利用目的を示す。学生の場合、「展示作品鑑賞」が76.8%(63人)で最も多く、次いで、29.3%(24人)が「ファッション書籍閲覧」、23.2%(19人)が「外国ファッション雑誌閲覧」であった。外部来場者では、「展示作品鑑賞」が最も多く、48.5%(16人)であった。次いで、「ファッション書籍閲覧」33.3%(11人)、「外国ファッション雑誌閲覧」18.2%(6人)であった。順位は学生らのアンケートと変わらないが、目的内容の比率に差が見られた。学生は友人、教員の展示を楽しみに訪れる場合が多いのに対し、外部来場者は知り合いの作品展示を目的にきている人もあると思われるが単に展示自体の内容を楽しみに出かけていると考えられる。

「展示作品を見たことがありますか」の質問に対して、71.8%(89人)が「ある」と答えている。図5は作品を見た感想をまとめた結果であるが、学生、外部来場者ともほとんどが「よかった」と答えた。友人や先輩、教員の展示作品の鑑賞のためであるかもしれないが、比較的良好な印象を持っていることが分かった。しかし、中には「展示に工夫がほしい」6.7%(6人)と、厳しい意見もあった。

図6は、「毎月図書館より発行されているチラシについて見たことがあるか」の質問に対する回答結果である。学生の場合、64.5%(80人)が「ない」と答えており、認知していない実態が分かった。外部来場者の場合は、「ない」が60.6%(20人)で同様の結果である。このチラシは、岐阜市立図書館員が次月展示担当者へ取材後、作成している。設置場所は、本学生生活デザイン学科の個人ロッカー前の雑誌棚や岐阜市立図書館、およびファッションライブラリーで、これらの施設でしか手に入らないことから、学生にとっても外部来場者にとっても、認知度が低い。「ある」と回答した人に対して、このチラシに関する感想を尋ねたところ、「よかった」が24.2%(8人)で、「たいへんよかった」6.1%(2人)の順であった。外部来場者の場合は、「よかった」51.7%(46人)、「たいへんよかった」41.6%(37人)がほとんどを占めた。「内容に工夫がほしい」は6.7%(6人)であった。

これまで行った生活デザイン学科の展示で特に印象に残った展示について複数回答で答えてもらった。図7にその結果を示す。学生の場合、「2月/“identity”~自己主張~」アパレルデザイン研究室、「10月/“Dress of Black”」アパレル設計生産研究室、「4月/卒業生展『からむし織小作品』」、「メイデー maid」、「7月/“Trick Art WORKS EXHIBITION”」久保村里正、「1月

## ファッションライブラリーにおける生活デザイン学科の取組とその評価

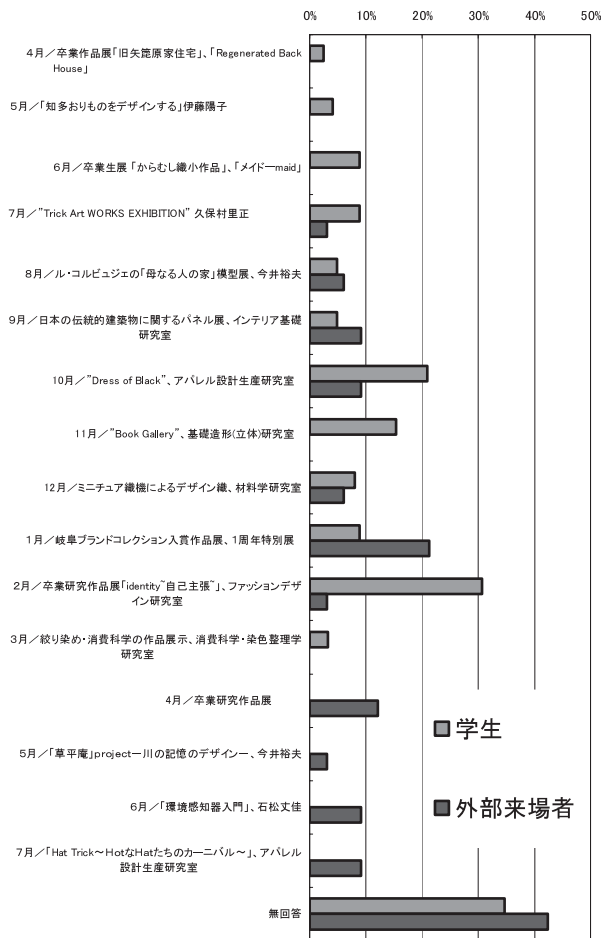


図7 印象に残っている展示

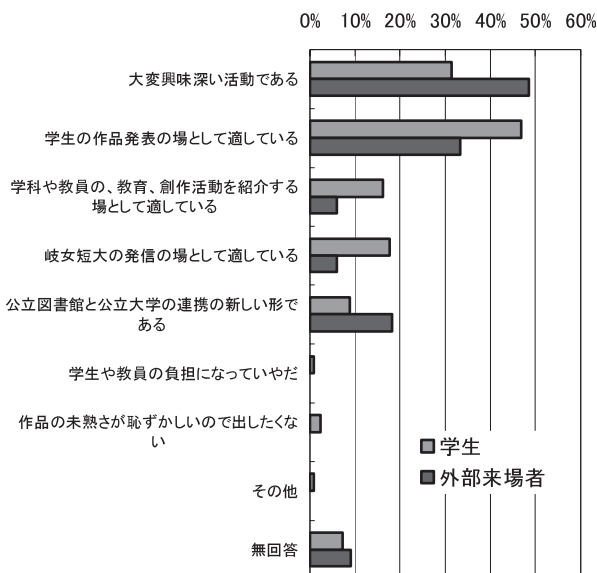


図8 展示活動に対する評価

1周年特別展『岐阜ブランドコレクション入賞作品展』などが印象に残っているようであった。学生は、友人らの展示に多く足を運んでいる実態がわかった。これは特に卒業生のデータに顕著な結果であった。外部来場者では、「1月/1周年特

別展『岐阜ブランドコレクション入賞作品展』が最も多く、次いで「4月/卒業研究作品展」、「9月/日本の伝統的建築物に関するパネル展」インテリア基礎研究室、「10月/「Dress of Black」」アパレル設計生産研究室、「6月/「環境感知器入門」」石松丈佳、「7月/『Hat Trick ~ HotなHatたちのカーニバル ~』」アパレル設計生産研究室であった。

そして、「このような生活デザイン学科の展示活動をどう思うか」について複数回答でたずねたところ、図8に結果を示すように、学生の反応として「学生の作品発表の場として適している」、「大変興味深い活動である」、「岐阜短大の発信の場として適している」、「学科や教員の教育、創作活動を紹介する場として適している」であった。外部来場者からは、「大変興味深い活動である」、「学生の作品発表の場として適している」、や「公立図書館と公立大学の連携の新しい形である」との意見があった。外部来場者では、「大変興味深い活動である」が16人(48.5%)、「学生の作品発表の場として適している」が11人(33.3%)、「公立図書館と公立大学の連携の新しい形である」6人(18.2%)との評価を受けた。

今後の展示に関する希望、要望についての自由記述には、学生は、「柳ヶ瀬などでも(展示とか)発表してほしい」、「どんどんしてください。」「また製作した服を飾って欲しい!!!」「今までみたいにやっていけばいいと思います。」「名鉄にも展示すると思う。JRだけでは少し遠い。」「作品展示はとて面白い思い出になりました」「学生のやりたい事を積極的にやらせてよい作品ができるとよいと思います。」などの意見が出された。このような生活デザイン学科の展示および活動を、積極的に受け入れ、歓迎していることが読取れる。

「自分の作品を展示したことがありますか」の質問に対して、「ある」36.3%(45人)で、「ない」が62.1%(77人)であった。展示したことのある学生のうち91.1%(41人)が「よかった」、6.7%(3人)が「やりたくなかった」、2.2%(1人)が無回答であった。「それはどうしてですか」の質問に対して、「作品発表の機会が得られてよかった」が64.4%(29人)で、次いで「作品作りに意欲的に取り組めてよかった」が17人(37.8%)で、「学外者、一般の反応が聞けてよかった」が13.3%(6人)であった。しかし、「作品制作が負担だったので、やりたくなかった」、「うまく作品ができなかったので、やりたくなかった」が2.2%(1人)あった。自分の作品を展示したことが無い学生に「今後機会があればやりたいか」の質問に対して、「やってみたい」が71.4%(55人)で、「やりたくない」が15.6%(12人)で、無回答が14.3%(11人)であった。この結果から、今後も学生の展示活動を積極的に推し進めていきたいと考える。また、「生活デザイン学科の一員として自分の作品を展示する活動をどう思いましたか」の質問に対して、「大変興味深い活動である」が41.9%(52人)、次いで「学生の作

品発表の場として適している」が40.3% (50人)、「学科、教員の教育、創作活動を紹介する場として適している」、「岐女短大の発信の場として適している」が13.7% (17人)、「外部からの評価が受けられることは意義があることだ」が9.7% (12人)、「自分たちの作品発表ができて満足している」が7.3% (9人)、「公立短大と公立大学の連携の新しい形である」が4.0% (5人)などの回答を得た。学生らも展示活動の意味を理解し今後も展示活動を通して、地域と交流し外部の評価を受けていきたいと考えていることがうかがえる。

展示作品について見たことがあるかに対して、「ある」の回答は78.8% (26人)で、「全体的にどんな感想を持ちましたか。」の質問に対して「たいへんよかった」が最も多く45.5% (15人)で、次いで「よかった」27.3% (9人)であった。中には、「展示内容に工夫がほしい」という厳しい意見も6.1% (2人)あった。「つまらなかった」と回答した人いなかった。

一方、外部来場者に対する「今後の展示や活動に関する要望の自由記述に対して、「もう少し華やかな服をつくる」、「手芸他手作り品の教室やってほしい」、「手編み、フェルト、靴下」、「普段のライフスタイルに取り入れやすい展示などあるとおもしろい」、「服に大変興味もっているので製図もできればのせてほしい」、「4年間洋裁学校に通い、若い頃はいろいろなファッションを身につけたりもしました。今50才近くになり日本の美の追求をしたく、創作をしています。若い人たちも日本を見つめ直し日本の美を世界に広げていってほしいです。」「ガラスの中のドレスを一度着てみたい」、「いろいろな服を展示してほしい。ドレスとか見ているだけでうれしい。」などの意見が寄せられた。

2003年5月よりはじめたギャラリートーク&ワークショップを中心とした公開講座「ファッション講座 in ファッションライブラリー」について、「特に印象に残っているものがあるか」の質問に対して、「7月/『羊毛から手作りフェルト帽子をつくらう』が最も多くなった。これは、講座終了後に参加者の多くにアンケートに協力してもらったからだと思われる。「生活デザイン学科のギャラリートーク&ワークショップ活動はどうか。」の質問に対して、「大変興味深い活動である」が27.3% (9名)、「学科、教員の教育、創作活動を紹介する場として適している」、「公立図書館と公立大学の連携の新しい形でよい」がともに18.2% (6名)で、「様々な分野の専門的な話や活動ができて楽しい」9.1% (3名)であった。「内容に興味を持てなかった」、「教員の勉強不足が感じられた。」の回答はなかった。

「今後のギャラリートーク&ワークショップ活動に関する要望などに対して、「きれいだ」、「出来るだけ出席したい」、「帽子作りはとても楽しかったのでまたこのような機会があれば参加してみたいです。」「黄色の照明がすずしさをさえぎりがえっ

て暑い!!」、「ここに来なければ知ることができないので、もう少し広く広報すればよいのと思っていますし、お話のときは、もっとひろくもっとみんながきければもったいないように思います。と言っても10月、12月と2回でしたが内容によってはついでに長良川大学の一部になるとよいですね。」などの感想が寄せられた。

### 3. まとめ

ファッションライブラリーという「場」を媒体として活動して2004年3月には2周年を迎える。学科としては作品展示、公開講座の実施を通じた情報発信を、市立図書館としてはアパレル産業支援図書館としての情報提供を、さらに産業界は作品展示を通して企業活動の紹介を行い、それぞれが補完しあうことで産官学の連携の形が芽生え始めてきていることがわかった。また、単に岐阜市という狭い地域での取組というだけでなく、立地の良さから広く県内、他県からの利用者もいることがわかった。今回の外部来場者を対象とした調査は、留め置き法であったため、アンケートに積極的に答えてもらうことができず、データ数を確保できなかった。今後ファッションライブラリーでの産官学の取組を広く周知し連携の効果をあげるために、積極的な調査が必要である。

さらに我々の活動の存在を知らない人が多く、広く周知する必要性を感じる結果となった。

ファッションライブラリーにおけるこれらの取組は、大学の学外における活動、地域との交流という側面があり、これは公立大学としてますます求められる機能である。一方で、公立図書館が図書館活動を通して地域の産業を支援するという、新しい機能を持つ機関として、注目され始めている<sup>3)</sup>。さらに、岐阜市には市の発展と歩みをともにしてきたアパレル産業があるが、社会の変革の中で、そのあり様にも再考の流れが見られ、生き残りのための動きも出てきている。「学」、「官」、「産」の機能はそれぞれ連携することで、より機能を発揮し地域の発展へと繋がる。このような環境の中で本学科の取組は、文部科学省「特色ある教育支援プログラム」に、本学科の申請した「デザインを通じた地域との交流による教育 『学生を育てる』『地域を育てる』総合的な教育の取組」<sup>5)</sup>として採択されたことでも評価されているが、それぞれの活動としては緒についたばかりである。

今後も、ファッションライブラリーという「場」を媒体としたこのような活動を通して地域、産業と交流を深め、ともに成長する関係を構築していきたいと考える。

### 4. 謝辞

最後に、これまでの展示活動を支えてくださった行政、産業界の皆様、今回のアンケートにご協力頂いた岐阜市立図書館分

館・ファッションライブラリー担当職員、来館者の方々、岐阜市立女子短期大学生生活デザイン学科の学生に深謝いたします。

## 5. 引用文献

- 1) 村上真知子、久保村里正、山田綾：平成14年度岐阜市立女子短期大学行政施策研究費受託研究「The Fashion Renaissance in Gifu 2002」研究報告書、岐阜市立女子短期大学生生活デザイン学科2002、p168
- 2) 岐阜婦人子供服工業組合主催「第2回 Gifu Bland Collection」
- 3) 常世田良：「浦安図書館にできること」2003年5月、頸草書房、p160
- 4) 内閣府 「地域の経済2003」2003年11月17日、p8
- 5) 文部科学省特色ある教育支援プログラム岐阜市立女子短期大学生生活デザイン学科、申請・採択書類「デザインを通じた地域との交流による教育 『学生を育てる』『地域を育てる』総合的な教育の取組」  
(提出期日 平成15年12月10日)